

ZOCALO 2024 10・12

ZOCALO = ソカロは
メキシコの都市の広
場を意味するスペイ
ン語。埼玉県立近代
美術館はアートを通
じて交流する市民の
広場をめざしています。



【主な記事】

企画展関連特集「没後30年 木下佳通代」

MOMASコレクション関連特集「特集:木村直道」

MUSEUM NEWS 2024.10 ▶ 2024.12

ミュージアムショップおすすめ商品

美術館の舞台裏「企画展出品作家の「その後」—Nerhol」
新任学芸員紹介「どうぞよろしく！」

表紙: 1986年、三菱倉庫屋上のアトリエにて、大作(86-CA323)の前に立つ木下佳通代。(写真提供: トアロード画廊)

没後30年 木下佳通代

美術家・木下佳通代(1939-1994)をご存じでしょうか。兵庫に生まれ、1960年代から90年代に関西を拠点に活動し、理知的な制作態度と気さくな人柄により多くの作家仲間から慕われていたという人物ですが、その全貌を解き明かす展覧会はこれまで実現していませんでした。このたび、国内における初めての大規模な回顧展を、大阪中之島美術館と当館との共同企画として開催します。

京都市立美術大学(現・京都市立芸術大学)の西洋画科に入学した木下の作家活動は、油彩画から始まりました。初期に描いていた作品(図1)には、植物を思わせる形態が自由自在に伸びていく抽象的イメージが表れています。パウル・クレーの抽象絵画に影響を受けて描かれたというシリーズですが、そのコンセプトの根底にあるのは地球上における「存在」に対する問いでした。晩年のインタビューで木下はこの頃の作品について振り返り、次のように話しています。「私が本当に見ようとしているのは、"等価に存在する何か"。生命体でも精神でも」。この「存在」に対する関心は、木下の制作における生涯のテーマとなっていました。



図1

1970年代に入ると、グループでの制作の誘いを受けたことを機に写真作品に着手します。「存在」を確かめる要素として「視覚」や「認識」にも関心を抱いていた木下にとって、対象を客観的にとらえるメディアである写真は、自身のコンセプトを明確に表現するのに適していました。《Untitled-b/む103(壁のシミ(ブロック))》(図2)という作品があります。同じ壁を写した写真が2枚並べられていますが、よく見ると右側の壁にはチョークで○がつけられていることに気づきます。写っている壁は、存在としては同一であるにもかかわらず、チョークの印に気づいた途端、別物として意識せざるを得なくなるのです。「ひとつの存在に対する認識の複数性」という事象を、複数の写真を用いた組作品によって木下は表現していききました。

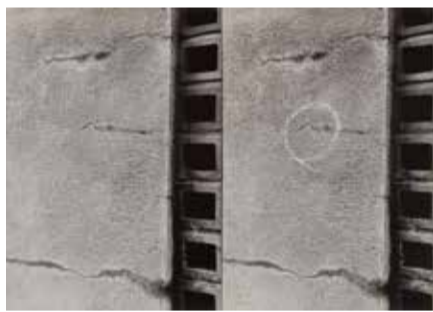


図2

1976年には、幾何学図形を写した写真の上から、同じ形をフェルトペンで書き重ねるシリーズへと展開していきます。ここでも問題となっているのは「視覚」と「認識」の関係性です。《76-C》(図3)を見てみましょう。コンパスを使って紙に円を描く様子が写真に写されていますが、少し角度をつけて撮影されているために、紙の上に図像として現れているのは楕円形です。しかし、私たちは経験上、実際に描かれているのは真円だと認識します。



図3

企画展「没後30年 木下佳通代」

2024年10月12日(土) ~ 2025年1月13日(月・祝)

そうして認識した「正しい形」を写真の上から描くことで、視覚で捉えているものと認識するもの間にズレが生じていることを示しているのです。普段は気にも留めないような「認識」のプロセスを木下は洗練された表現で丁寧に掘り上げ、存在への問いを提示していききました。この写真を用いた一連の作品は、同時代のコンセプチュアルな美術動向とも呼応し、1981年にはドイツのハイデルベルク・クンストフェラインで個展を開催しました。

しかし、その頃にはすでに、作家は次の展開を見据えていました。長い時間を要するうえ、禁欲的でシステムティックな写真シリーズの制作に、徐々に抑圧を感じるようになったのです。自分自身を解放していくように、自らの手を動かしてパステルを用いた作品を制作し始めると、それまでの認識論的な表現から離れるための手法を模索していきました。やがてパステルから油彩とカンヴァスへと表現媒体を変えた木下は、存在の概念を表現に取り入れるのではなく、存在そのものを自分が画面上に作り出せばよいのだと思いつき、油彩による新たな境地へと足を踏み入れました。模索の果てに木下が見つけ出したのが、絵具をカンヴァスに塗り込んだ後、布で拭き取るという手法です(図4)。地としてのカンヴァスと色面としての絵具を等価に扱うことで、存在の本質に近づくことができると考えたのです。さらに「存在」を追究した木下は、「どんなイメージにもならない」作品を目指し、限られた筆のストロークによる緊張感の漂う空間を作り出していきました(図5)。



図4

しかし、油彩での表現が軌道に乗り始めた1990年、木下は乳がんの宣告を受けます。制作を継続させるため手術をしない選択をした木下は、治療を求めてロサンゼルスを度々訪問しながら精力的に活動を続けましたが、1994年、55歳の若さでこの世を去りました。



図5

木下の作品を見て驚かされるのは、初期から晩年まで、一貫したコンセプトの上に作品が成立していること、そして、そのきわめて理知的な表現が、現代においても全く色褪せず新鮮に感じられることです。展覧会では作品のみならず、木下の思考を紐解く材料として、作家自身が遺したブランドローイングやスクラップブックなどの資料も豊富に紹介します。本展をきっかけに、多くの人が木下佳通代の作品の魅力を再発見し、関東圏においても作家の軌跡が広く認知されることを心から願っています。(S.Ayu.)

図1 《無題》1962年、油彩、カンヴァス、The Estate of Kazuyo Kinoshita
図2 《Untitled-b/む103(壁のシミ(ブロック))》1974年、ゼラチン・シルバー・プリント、大阪中之島美術館(前期展示)
図3 《76-C》1976年、フェルトペン、感光紙、大阪中之島美術館
図4 《83-CA74》1983年、油彩、カンヴァス、個人蔵
図5 《91-CA652》1991年、油彩、カンヴァス、京都市美術館

特集:木村直道

木村直道(1923-1972)は、廃材を用いたユーモラスな「スクラプチャー」の作品で知られる埼玉ゆかりの作家です。東京都文京区に生まれ、幼い頃から絵や英語に親しんでいた木村は京北実業学校を卒業後、出版社に勤める傍ら、川端画学校に夜間通いながら絵を学びました。戦後、兵役を解除されると埼玉県入間郡福岡村(現在のふじみ野市)に移り住み、1952年から1956年ごろまで寺内萬治郎に師事しながら油彩画の制作を行います。また同時期には、独学で身につけていた英語を活かしアメリカ文化センターに就職しています。当時のアメリカ文化センターは、日本にアメリカの文化状況や最新の現代美術の動向などを紹介する数少ない窓口であり、催事係美術担当としてアメリカ美術との直接的な接点を持った木村は大いに刺激を受けたと考えられます。また、1955年にはアメリカ文化センターで油彩画の個展を開催し、その後もたびたび作品発表の舞台としていました。



《籠》1965-71年、バリカン、金属

1959年以降は、日本で開催されていたアフリカの原始彫刻展に足を運んだことをきっかけに彫刻へと関心を寄せていきます。はじめは直接的に影響を受けたアフリカ彫刻の模範を手掛けていましたが、次第に鉄屑や廃材を溶接して形を生み出す「スクラプチャー」の制作が中心となっていきました。「スクラプチャー」とは、廃材を意味するscrapと彫刻のsculptureを言葉遊び的に掛け合わせた木村の造語で、元型となる廃材の形を活かしながら、動物や人物などさまざまなモチーフへとユーモラスに見立てた彫刻作品のシリーズです。例えば、ガルマヒーターとバリカンを組み合わせた《籠》(1965-71年)は、ヒーターの電熱線部分を籠の胴体に、バリカンのギザギザした歯を髭や牙



《こわれたダダ》1971年、ミシン、自転車のサドル、鉄、金属

に見立てています。このような木村の「スクラプチャー」は、とりわけ20世紀初頭に台頭したダダリストやシュルレアリストが好んで用いたアッサンブラージュと呼ばれる手法によく似ています。廃材や既製品などの立体物を寄せ集め、組み合わせるアッサンブラージュは、前衛芸術家たちにとって既存の美意識や芸術的価値を破壊・転覆させるための一つの手段だったのです。

おそらく木村は、アメリカ文化センターでの職務を通じて戦時中から戦後にかけてアメリカで活躍したマルセル・デュシャンらの作品や、ニューヨーク近代美術館の「アッサンブラージュ」展(1961年)などの展覧会の情報を知り、彼らの野心に呼応するような形で自分自身の表現の一部に取り入れたのだと思われます。木村も欧州のダダリストたちと

MOMASコレクション 2024年11月30日(土) ~ 2025年3月2日(日)

同様に、戦後直後の瓦礫の海、そしてそのすぐさまに発展していく科学技術や産業という、廃棄されゆく工業製品たちの存在へと目を向けさせる風景の中に生きていたのです。一方で、木村の作品は子供でも楽しめるようなシンプルな遊び心に溢れ、デュシャンのような前衛作家たちの難解さに比べるとずっと明快に見えます。それはかつてアフリカ原始彫刻を模範するなかで見出した、形態が見るものに与える直感的な意識や感情への関心が根底にあったからかもしれません。

1960年代後半になると、木村の作品は数多くの批評家たちに言及され、アメリカでも紹介されるなど今後の活躍が期待されていましたが、1972年の自死によって、その生涯の幕は突然閉じてしまいました。しかしながら、見捨てられ、廃棄されるはずだったものに木村が命を吹き込んだ「スクラプチャー」の作品たちは、今なおわたしたちの前で生き生きと遊戯的なイメージを与えてくれるように思われます。

本コーナーでは、当館に収蔵されている木村直道作品を一挙に公開し、一人の作家が戦後日本に見出そうとしたユーモアとは何か、再びその試みに光を当てます。(M.R.)



《ペンギン》1971-72年、靴、まち針、木、塗料、金属